# 富士特だより

【 めざす学校像 】
*児童生徒一人一人の自立を育てる*
*笑顔あふれる学校*
富士見市立富士見特別支援学校
令和３年９月１日（水）第６号

## ２学期の始業にあたり

令和３年度２学期の始業は、災害級の新型コロナ感染が続く中でのスタートということで、まさに大荒れの海への船出となりました。感染拡大防止策の一層の強化が当面の課題でありますが、児童生徒とご家族の安心安全を第一に考えるとともに、地域の感染が広がらないようにするために、何が効果的で、何が必要不可欠であるかを見極め、的確な判断の下、学校運営を推進してまいります。今年度は、学びを止めないことをテーマに新型コロナウイルス感染症に負けない学校づくりを掲げて、教育活動を行ってきましたが、緊急事態宣言期間等におきましては、学校行事を中心に、中止・延期判断をさせていただくこととしました。今後の感染状況や医療の逼迫状況等を精査し、柔軟に対応いたします。引き続き保護者や地域の皆様のご理解ご協力をお願いいたします。

## 東京パラリンピック２０２０に期待すること

オリンピックとパラリンピックの一番の違いは、パラリンピックには、パラアスリートのレジリエンスを通して、「多様性と共生社会」という強いメッセージ性があることだと考えます。レジリエンスとは、本来「回復力、弾性」という意味ですが、ここでは、病気やケガ、不幸などの困難な状況から立ち直る力を意味します。言い換えると、パラアスリートが、自身の障害や障害があることを理由に夢や希望、可能性の実現をあきらめるのではなく、周囲の支援を受けながら、残された機能等を駆使して、夢や希望、目標の達成に向け、折れない心を持ち、挑戦を続けることを指します。「多様性と共生社会」については、SDGｓに通ずる「障害の有無に関わらず、互いの良さを認め、持てる力を最大限に発揮し合い、よりよく課題を解決し、持続可能な社会の実現を目指す」ということであり、そのためには、国籍や性別、障害の有無に関わらず､すべての人が互いに尊重することができる社会の実現が大前提であるいうことです。日本は１４年前のオリ・パラ誘致で、ブラジルのリオに敗れました。当時の日本には「多様性と共生社会」という文化が浸透しておらず、パラリンピックを成功させるだけの下地が整っていなかったという内容の後日談記事を読みました。残念ながら、当時の日本社会には、「共生社会は、障害者を助けなければいけないという義務感で成り立つ社会ではなく、障害のある人もない人も同じように暮らし、生活をする上で、障害という言葉を意識する必要がなくなることが共生社会のゴールである」という考え方が根付いていなかったということです。

私は、開会式や自らの可能性にひた向きに挑戦するパラアスリートの姿を観て、胸を熱くし、力強くも温かなたくさんのメッセージを感じています。競技種目により差異はありますが、パラアスリートには、コーチやトレーナー、医師や理学療法士、装具士、栄養士やメカニックなど１０数人のサポートスタッフがいるそうです。パラアスリートは、自身や家族のためだけでなく、こうしたサポートスタッフ（支援者）の期待も背負って挑戦しているのです。特別支援

学校は、主役である児童生徒を中心とした保護者、教職員、学校関係者、地域の皆様という児童生徒の自己実現に向け、支援するサポートスタッフの集合体ですから、パラリンピックと共通するものがあります。児童生徒の頑張る姿や笑顔は、サポートスタッフのエネルギー源です。特別支援学校の校長として、「学校連携観戦プログラム」の中止は残念ではありますが、できるだけ多くの子どもたちや保護者、地域の皆様に、パラリンピックの熱戦をテレビ観戦することをきっかけに、「障害があって気の毒」→「障害があるのに頑張っている」→「障害なんて関係ない」→「すごい、自分も頑張りたい」→「自分もできることを見つけて、頑張る人を支えたい」に印象が変わること、そして、共生社会の樹立に向けて、これらを通して、東京パラリンピック２０２０が、子供たちの心のレガシーになることを期待して止みません。

校長　阿部　和彦